

Olive = オリーブ

東京：平凡出版, 1981-2003

「Olive」は1981（昭和56）年10月20日、「Magazine for City Girls」をキャッチフレーズに、当時公称部数68万部という人気を博していた「Popeye」の増刊号（1981年11月5日号）としてスタートした。増刊号として2回発行された後、1982（昭和57）年6月3日号から独立して創刊された。出版社は平凡出版（1983年にマガジンハウスに改名）、月2回の刊行で始まった。

創刊当初は「Popeye」編集長の安田富男が兼任し、アートディレクターも同じく「Popeye」を手がけていた新谷雅弘。その他のスタッフも「Popeye」と多数共通しており、判型も26×21cmで同じであった。

創刊後約1年は「Popeye」の妹版といった感じで、独自のコンセプトが確立されていたわけではなかった。しかし1983（昭和58）年8月にリニューアルされ、サブタイトルを“Magazine for Romantic Girls”に切り替えて、夢や憧れの

ライフスタイルを提案するようになってから独自性が際立ってくる。80年代から90年代にわたり、パリの高校生風の着こなし“リセ・スタイル”やボーダーTシャツなどのベーシックアイテムをシンプルに着こなし“フレンチ・カジュアル”などを次々と提案し、熱心な読者を獲得した。本誌読者の一群は「オリーブ少女」とも呼ばれ流行現象を巻き起こした。またセンスがよく、かわいいという一定の価値観で選んだ雑貨やカフェを多数紹介して各々のブームを牽引したり、オリーブ流のライフスタイルを提案することによって独特の世界観を作り、10代、20代の読者に“永遠の少女性”を植え付けたともいわれている。

「Olive」には栗尾美恵子や市川実日子、高橋マリ子など、後に人気の出るモデルや、大森仔佑子や岡尾美代子など現在各方面で活躍するスタイリストなどの仕事振りが誌面に残されている。全盛期の編集長としては各方面から淀川美代子の名前があげられている。「ジュニアそれいゆ」の愛読者だったともいわれている淀川が持つ、大人の女性になる前の少女特有の愛らしさにターゲットを絞った視点が誌面に生かされ、支持されていたようである。淀川は後に、年齢が上がり「オリーブ」を卒業した読者を対象としたファッション誌、「Ginza」の創刊を手がけている。雑誌「編集会議」（2001年5月号）のインタビュー記事で、淀川は「Ginza」を「かわいい気持ちを失わない大人の女性



1981年11月5日号表紙

を表現した雑誌」と語っている。また、同じく元編集長の岡戸絹江は2003（平成15）年、日常を大切に暮らすことを提案する雑誌「Ku:nel」の初代編集長となった。「Olive」では雑貨など日常生活に寄り添う何気ないものに目を向け愛しんでいたが、その視線は「Ku:nel」にも引き継がれたようにも見受けられる。

90年代半ばには、他社から読者年齢が競合する様々なスタイルの雑誌が創刊され、その影響を受けてか発行部数が減少、2000（平成12）年7月18日号で一時休刊を余儀なくされた。翌年夏にはファッション誌を数多く手がける藤本やすしをアートディレクターに迎え、「100%女の子宣言！」をコンセプトに月刊誌として復刊したが、2003（平成15）年8月号をもって再度の休刊となった。

関連書籍としては、マガジンハウスから人気コーナー「読者からの手紙」をまとめた『オリブ・クラブ』や、掲載されていたコラムなどをまとめた『オシャレ泥棒』（中森明夫著）、『みーんな、わがまま』（秋元康著）、『のんちゃんジャーナル』（仲世朝子著）がある。この他の関連書籍としては、Olive特別編集でオリブ少女好みな雑貨を集めた『Zakka book : 72の雑貨の話』『雑貨少女の楽しい毎日。：大好き雑貨にかこまれて』が、またプチグラパブリッシングから連載企画をまとめた『しまおまほのひとりオリブ調査隊』（しまおまほ著）が出版されている。（小澤万紀）



1984年2月18日号より